

不変と革新

～長寿経営に向けて～

事業をつなく

研磨技術の一種であるバレル研磨。ニッチながら、その用途は多岐にわたり、モノづくりを縁の下で支えている。チップトン（名古屋市南区、小林知宏社長）はバレル研磨機、消耗品ともに国内トップシェアを独走する。創業から90年近く、連続と受け継がれているのは、現状維持を非とし、常に未踏の地に挑戦する開拓者精神だ。

小林社長の祖父、久峰氏が研削砥石メーカーとして創業。戦時中、墜落した米

チップトン（名古屋市南区）

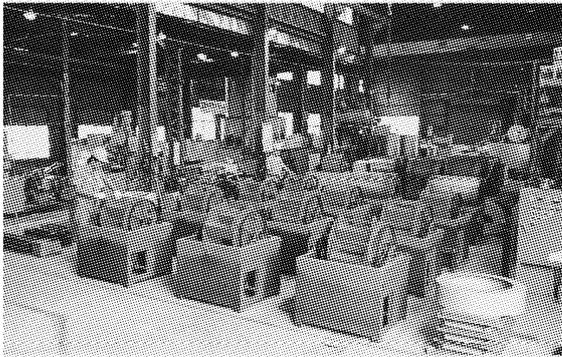
バレル研磨、未踏の地へ

国の爆撃機「B-29」の部品を見た久峰氏は、その研磨技術の高さに驚嘆した。日本でまだ知られていないバレル研磨なる技術が使われていた。戦後に単身渡米。技術を持ち帰り1953年にバレル研磨機の製造を始めた。その後、消耗品の研磨石とコンパウンドもつくり始め「バレル研磨の総合メーカー」という独自の立ち位置を確立した。

飛躍のきっかけは61年に開発した世界初の「遠心バレル研磨機」。田周上に配置したバレル槽が自転しながら公転する遊星回転を採用。従来に比べ「生産効率は約50倍上がった」（小林社長）。注目されシェアを伸ばした。現在は、それを進化させ最大40Gの遠心力がかかる「重圧バレル研磨機」が売れ筋。ネオシム磁石や積層セラミックコンデンサー（MLC）の生産に欠かせない存在だ。

多角化にも果敢に挑戦する。チヨコレート菓子などのコーティング装置で食品業界に進出し、医薬、二次電池業界向けに「テイラー渦式連続反応晶析装置」を開発した。企業理念の「森羅万象に生かされ、志をもつて一隅を担う」にはニッチトップの存在意義が込められている。トップランナーは「誰かのまねではなく常に新しいモノを發明・開発し続けることが役割だ」（小林社長）と強調する。

「遠心バレル研磨機」を量産する工場（1970年ごろ）



【企業メモ】1939年（昭和14）創業。小林知宏氏は4代目の社長。2003年度に売上高100億円（28年3月期は57億円の見込み）が目標。次の挑戦の舞台は海外。26年1月に米アリゾナ州に販売子会社を設立した。